

ロータリーに思うこと

福山 松田 種光

旧制高等学校同窓会が京都であった。帰りの列車の中で、楽しかった数時間を省みながらふとロータリーの楽しさと同じであること思った。入会七年目の小さな発見であったが、ロータリアンとして進歩した証拠でもあらう。思い起せば、入会して三年目の頃、ロータリーに対する疑問に次々と思いついた。例会のたびに歌う内容と現実との差に抵抗も感じた。同じような感想を語り合った同じクラブの友が週報に寄せた一文があるが、その大要は次のようなものであった。アメリカの社会は横の社会である。動先から一歩出れば上下の関係は全くなく友の関係であり、その友愛は率直で深い。日本は縦の社会であって何処に行ってもその上下の意識から抜け難い。ロータリーがアメリカに発展した基礎がここにあり、この点を考えると日本のロータリー発展には不安がある。この見方には一面の真実があると思う。しかし、日本のロータリーが欧米以上に発展する現実は何に基因するのか。この分析はここでは省略したい。

終戦後私共日本人は異常なまでの努力をし

たが、その活動範囲は、職業と家庭以外から出ること少ない。列車で旅しても隣席同志がただ黙々として、旅は道連れといった言葉が失われた現在であり、住めば近隣の付合も少ないのが一般の傾向である。私がロータリーに入ってから九年、東京と大阪のメークアップが非常に多いが、折角同席した隣同志のおしゃべりは年々少なくなる感じである。これは独り私だけでなく、ビジターがそれぞれ黙々として食事を済ませて去っていく傾向が次第に強くなるようである。

職業活動一筋という猛烈環境の下で、老境にある者のみならず、若い人も同様にこの傾向の強さを感じる。経済発展につれて、この人間の本性ともいえる傾向を如何におさえるか、これが問題点ではないだろうか。

このような世相の中で、奉仕を理想とするロータリー活動は高く評価すべきであるが、そのクラブ・メンバーだけの親睦に終始するのでなくてロータリアンであるが故にもっと純粋なフレンドシップから出る自然な振舞がでないものだろうか。自然に「遠い時には手を振りあおう」ができないものだろうか。見知らぬ同志がバッジを見たら目礼位できないものだろうか。

ロータリー活動の基礎がフレンドシップにあり、とは国際ロータリーの教える処である

が、この基本が少なくとも日本のロータリーには欠けていると言っては誤りであろうか。私たちが専念する本来の経済活動の傍ら、ロータリーであれ、趣味活動であれ、何かフレンドシップの足がかりを求めようとする努力が必要であり、ポールハリスがロータリーを創めた動機もこんな処にあったのかも知れないと思う。

日本のロータリークラブは、フレンドシップの原点に立ってよく考えてみるべき時ではないだろうか。

(広島県・ゴム製品製造)